

【コメント 2】

金谷 美和 KANETANI Miwa

京都大学人文科学研究所

レスピシオ氏の発表は、京都の西陣での調査に基づいたものである。レスピシオ氏は、まず西陣を歴史に位置づけることを行った。西陣は、15世紀の応仁の乱の政変の中で、現在の西陣織の特徴である文模様の金襴の織物が中心になっていくなど、時代の荒波を受けることで変化し、再生して産地として成長していったことがまず明らかにされる。現在の西陣の衰退と危機的状況が数値によって示されたが、私にとっては、西陣を歴史の中に位置づけたレスピシオ氏の話は、現在の西陣の危機的状況も、乗り越えることができるものであるとポジティブに捉え直したエールであると受け止めた。

レスピシオ氏によると、現在西陣の直面している問題は、次のようである。一つは日本全体の経済不況、二つめが日本の生活が西洋化され、着物の需要が減っていることである。着物は、動きにくく現代の生活には機能的でないこと、またクリーニングなど手入れの手間がかかることなどで、需要は減る一方である。レスピシオ氏の提言は、西陣織は着物や帯に用途を絞らず、現代の洋服のファッションに適応した新しいデザインを作ることである。カジュアルで気易いものを制作し、それをモデルや女優が着て、テレビや雑誌、漫画のなかでプロモーションすることで、新しいスタイルとして若い人々のあいだに受け入れられるのではないかという提言であった。

この提言は、従来の西陣の伝統にこだわらない、外国人研究者からの視点として、大変貴重なものであると私は考える。私の研究しているインドの染織業界においては、まさにレスピシオ氏の提言と同様なことが政府主導で行われ、成功している。

インドの染織品は、多様で高度な技術とデザインによって有名であったが、19世紀に英国植民地下において機械製の繊維品との競争に敗れ、各地の産地は衰退の一途をたどっていた。1947年の独立後より、インド政府の繊維省が管轄となって、繊維産業の復興に努めた。その一つにデザインの開発とファッションとしての用途の開発があった。1961年には、インド全国で、手工芸に関する国勢調査が行われ、染織業を含めた手工芸品産地についての詳細なデータが集められ、それに基づいて政府は染織業の開発を行った。デザインについては、1961年にグジャラート州アフマダーバードに国立デザイン研究所がつけられた。そこでは学生たちは、伝統的な染織品の産地にフィールドワークにはいって技術とデザインを学び、それを近代デザイン理論にのっとして、新しい商品開発に活用した。1980年代になると、リトゥ・クマールというデザイナーが、伝統的な染織品をハイ・ファッションの世界にもちこんで成功し、「エスニック・シック」という言葉を流行させた。1986年には、国立ファッション技術研究所が設立され、国内のデザイナーを育てることでファッションの産業化がはかられた。それまでは海外デザイナーがインド染織品を

素材として用いることはあっても、インド人デザイナーが活躍することはなかった。現在は、インド人デザイナーが成熟し、ファッションの層は厚くなっている。ちょうど国立民族学博物館において『インド・サリーの世界』という特別展が開催されているが、この展覧会はインドの伝統染織がファッション産業の中で新しい展開を見せている事例として見ることができる。

もちろんインドの事例が、そのまま西陣にあてはまるわけではない。それは、インドにおいてはサリーやスルワール・カミーズという伝統的な衣服が継承されているからである。ただし、これらの衣服も実は決して変化にさらされなかった訳ではない。サリーは、全インド的な統一された衣服ではなく、サリーを着用しなかった地域もあり、また着用していた地域も、着尺や着用方法は異なっていた。スルワール・カミーズは、パンジャブ地方の女性の衣服であった物が、活動的で機能的、かつ身体をゆったりと覆うという社会的規範にも合致して、新しい「伝統的な」衣服として全国にひろまったものである。衣服とはこのような展開をみせるものであり、日本の着物に関しても、レスピシオ氏の指摘の通り、新たな応用と展開が可能であり、西陣の将来の可能性として検討する価値があると考えられる。